

高等学校における英語学習者の外発的動機づけの
調整スタイル・自己効力感・メタ認知方略と
学習成績の自己評価との関連

大西 三佳子 (立命館慶祥高等学校非常勤)
志村 昭暢 (旭川実業高等学校)

Abstract

This correlational study examined the relationships among the four regulations of external motivation (i.e., integrated, identified, introjected, & external regulations) in Self-Determination Theory (Ryan & Deci, 2000) , self-efficacy, metacognitive strategies, and perception of academic achievement. The participants were approximately one hundred private senior high school students. To collect the data for this study, we conducted a questionnaire survey of the four regulations of external motivation (Ryan & Connell,1989) , self-efficacy (Pintrich & DeGroot,1990; Sakurai,1987) , metacognitive strategies (Ichihara & Arai,2006) , and perception of academic achievement (Sakurai,1990) . The results showed that the participants' integrated and identified regulations predicted their academic achievement in perception, but their self-efficacy and metacognitive strategies did not predict it. Practical implications were presented on the basis of Self-Determination Theory.

1. はじめに

世界のグローバル化に伴い、自律した学習者の育成が小学校から高等学校までの学校教育における大きな目標のひとつとされている（文部科学省,2008a, 2008b, 2009）。河合（2000）は、自律した学習者の育成の問題点について、国際化や多文化化が進む中で学習目的が多様化し、学習期間が長期化した点と、学習者が多様化したにもかかわらず、それに対応する万能薬的 foreign language education 論がない点を挙げている。また、将来日本を背負って世界で活躍する人材を育成するためにも、自律した外国語学習者の育成が重要である。

Deci and Ryan (2000) による自己決定理論は社会環境の内発的動機づけへの影響についての理論的な枠組みを提示しており、自律的な学習者の動機づけの検証に有益な理論である。そして、自己決定理論の影響の下で自律性の概念は、言語学習における動機づけに重要な役割を果たしている (Benson,2011)。

近年、学習者の外発的動機づけの調整スタイルが学業成績に及ぼす研究が注目されており、自律的な調整スタイルである統合的調整と同一視的調整が学業成績に関連していることが指摘されている (Guay & Vallerand,1997)。しかし、同一視調整の方が統合的調整よりも学業成績を予測するとしている研究もある (Koestner & Loiser,2002; 西村・河村・櫻井,2011; 他)。学習者の外発的動機づけの調整スタイルと学業成績とはどのような関連があるのだろうか。

本稿では高等学校の英語学習者の自律的な外発的動機づけの調整スタイルとされている、統合的調整と同一視的調整を中心に、外発的動機づけの調整スタイルと学業成績の自己評価との関連を明らかにする。その際、学業成績に影響を与えるとされているメタ認知方略と、動機づけに影響を及ぼす要因とされている自己効力感と成績との関係についても検証する。

2. 先行研究

2. 1 有機統合理論

Ryan and Deci (2000) は自己決定理論における内発的動機づけについて、人間が生得的に有しているものであり、学習者が自律し、自己選択的に意志

を持って学習活動に取り組む状態のことで、自己決定性が最も高いとしている。また、外発的動機づけは、内発的動機づけほど自己決定性が高くないが、内面化と統合の過程を通じて自己決定に繋がるとしている。Ryan and Deci (2000) では自己決定理論の下位概念の1つとして、内在化と統合化の現象を扱う有機統合理論を提唱している。有機統合理論において、外発的動機づけを自律性の程度によって、外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整、統合的調整に分けている。外的調整とは外的な欲求や報酬に随伴して起きる動機づけであり、取り入れ的調整は、自己価値の維持や罪や恥の感覚の回避などに基づく動機づけである。同一視的調整は行動の価値を同一視して捉え、その価値を自分の物として受け入れている動機づけの状態であり、統合的調整とは自己と完全に統合された状態で、内面化された調整が自分自身の感覚として明確に取り入れられている状態である。つまり、統合的調整は外発的動機づけが内面化され、自ら進んで学習する状態のことを示しており、内発的動機づけに近い状態であるが、内発的動機づけの持つ生得性や興味・関心の高さなどの点は含まれていない。

Ryan and Deci (2000) は、外発的動機づけの調整スタイルの中で、統合的調整が最も自律性が高い状態で、次いで同一視的調整が高いとしている。そのため、Reeve, Ryan, Deci, and Jang (2008) ではこれら2つの調整を自己決定のレベルが高く、学習成績が予測されるので、自律的調整として扱っている。最も自律性が低い状態は外的調整であり、次に低いのが取り入れ的調整であるとしている。そのため、この2つの調整について、Lens and Vansteenkiste (2008) では抵抗や圧力、義務の感覚を伴って遂行されるので統制的調整としている。

2. 2 自律的調整と成績との関係

自律的調整が学業成績と関連していると指摘している研究は多数見られる。Vansteenkiste, Simons, Lens, Sheldon, and Deci (2004) は、ベルギーの大学生を対象とした研究で、自律的調整と自律的支援の環境が受講教科や新しい活動の成績向上に影響を与えていると指摘している。しかし、成績の持続性については影響しなかったと指摘している。Walls and Little (2005) では、7, 8年生を対象に英語及び、数学の成績と外発的動機づけの調整スタイル

との関係を検証した。結果は統合的調整についてはそれほど関係が見られなかったが、同一視調整の数値が高い学習者ほど成績が高いことが示された。また、Burton, Lydon, D'Alessandro, and Koestner (2006) は小学生の成績表と外発的動機づけの調整スタイルとの関係を質問紙調査により検証したところ、同一視的調整は学業成績のみに影響し、統合的調整は幸福感と学業成績に影響を与えることを明らかにした。

2. 3 動機づけと自己効力感・メタ認知学習方略との関係

2. 3. 1 動機づけと自己効力感

自己効力感について、Bandura (1997a) は目標に達するために行動を計画したり、遂行する自分の能力を個人的に判断する力であると定義している。Pajares (2008) によると、強い自己効力感を持っている学習者は、困難な課題を避けるべき脅威として捉えるのではなく、成就すべき挑戦と捉えていると指摘しており、自己効力感が高い学習者は、内発的興味が高く、活動に没頭し、やりがいのある目的を設定し、関与しつづけるとしている。つまり、「自分はできる」と認知することで、有能感を増し、内発的興味が高くなり、動機づけ意識が高まると考えられる。また、人間には将来どうなるかを心の中で表象する能力があるため、認知に基づく動機づけが可能になるとの指摘もある (Bandura, 1997b)。

Ehrman (1996) は教師と外国語学習者それぞれの動機づけ、自己効力感、そして不安に対する認知の方法を検証し、参加者の性格と外発的動機づけが強く結びついているという結果を示している。また、自己効力感は学習に対する自信の表れとして認知され、文法能力と相関関係があったとしている。

Schunk (1981) は小学生の算数の課題達成に着目し、モデリングや目標設定などの認知要因を統制変数として自己効力感と成績の関係を調査したところ、学習者の自己効力感は学習方法に影響を与え、学習成績に正の影響を与えたと指摘している。

2. 3. 2 動機づけとメタ認知方略

学習方略は動機づけと密接な関係があり、学習方略を適切に使うことで言語能力が向上し、自律的学習が促進されるといわれている (Chen, 1999; Hiromori, 2004; 他)。学習方略の中でも、メタ認知方略は内発的に動機づ

けられた学習者が多用する傾向にあると指摘されている (Chen,1999)。また、メタ認知方略は、学習者が言語学習を効果的なやり方で順序立て、計画するために役立つとされている (Oxford,1990)。メタ認知方略と動機づけとは、目的に向かって何らかの行動を行っているという点では同じであるが、メタ認知方略は学習活動のプランを立て、学習行動をモニターし、調整・修正を行う機能があるが、動機づけはその制御プロセスを始動し、維持するという点で異なっている (Zimmerman,1986)。

Pintrich and DeGroot (1990) は理科・英語について7年生を対象とし、自己効力感・内発的価値・テスト不安とメタ認知的方略が学業成績や課題遂行にどのように関連しているかを検証したところ、動機づけの高い学習者はメタ認知方略を使用し、学業成績や課題遂行を効果的に高めていることを明らかにした。また、Rivers (2001) では、民俗誌学的アプローチを使った質的研究で、グルジア語とカザフ語を学ぶ成人学習者を対象に、自律的言語学習態度を検証した。その結果、メタ認知方略と情緒的、社会的方略が言語学習過程や学習環境を制御しており、自律的学習が維持されていることが示された。

3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、本稿では、自己決定理論に基づき以下の研究課題 (RQ) を設定した。

RQ1 日本の高等学校における英語学習者の外発的動機づけ調整スタイルと学業成績の自己評価とにはどのような関連があるのか。

RQ2 学習者の動機づけ調整スタイル、メタ認知方略、自己効力感と成績の自己評価にはどのような関連があるのか。

4. 研究方法

4. 1 調査対象者

本研究における参加者として、私立の全日制高等学校普通科3年生男子 36

名、女子 65 名、計 101 名を抽出した。調査は 2012 年の 7 月の上旬に実施した。参加者はほぼ全員が大学進学を目指し、意欲的に学習に取り組んでいる集団である。

4. 2 質問紙

本調査では質問紙を採用し、学習者の外発的動機づけ調整スタイル（統合的調整・同一視的調整・取り入れ的調整・外的調整）の傾向を知る項目について、Ryan and Connell (1989) の項目を採用した (22 項目)。

成績の自己評価を知る項目について、櫻井 (2009) を基に作成し、高校生が回答しやすい内容に調整した (6 項目)。成績について、本来であればプレイスメントテストの結果等の客観的なものを使用すべきであるが、参加者の心理的負担を考慮し、自己評価による成績を採用した。また、自己効力感についての項目は Pintrich and DeGroot (1990) と櫻井 (1987) の項目を採用した (14 項目)。メタ認知的方略は市原・新井 (2006) を (8 項目) 採用した。すべての質問項目は付録として巻末に添付した。先行研究で採用されている質問項目は海外での調査 (Ryan & Connell, 1989; Pintrich & DeGroot, 1990) であることや調査対象の年齢層が本調査と異なる (櫻井, 1987; 櫻井, 2009; 市原・新井, 2006) ため、本調査の参加者である高校生が回答しやすい内容に調整した。質問は「全く当てはまらない」から「とてもよくあてはまる」の 5 件法 (リカートスケール) で行った。

4. 3 分析方法

学習者の外発的動機づけ調整のスタイルと成績との関連の検証について、統合的調整 (6 項目) ・同一視的調整 (6 項目) ・取り入れ的調整 (5 項目) ・外的調整 (5 項目) と成績の自己評価に関する各項目の平均点を用いて、重回帰モデリングを行った (RQ1 に対応)。次に、外発的動機づけ調整の傾向と自己効力感・メタ認知方略と成績の自己評価との関連について、重回帰モデリングを行った (RQ2 に対応)。各分析には IBM SPSS Advanced Statistics 18.0 と Amos 18.0 を使用した。

5. 結果

5. 1 外発的動機づけ調整のスタイルと成績の自己評価との関連

外発的動機づけ調整のスタイルと成績の自己評価との関連を明らかにするために、まず、統合的調整・同一視的調整・取り入れ的調整・外的調整の各項目記述統計量と相関係数を算出した（表1）。結果は、統合的調整と同一視的調整 ($r=.737$)、統合的調整と取り入れ的調整 ($r=.432$)、同一視的調整と取り入れ的調整 ($r=.336$) が統計的に有意に相関していることが示された。

次に、統合的調整、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整を独立変数、成績の自己評価を従属変数として重回帰モデリングによるパス図を作成した（図1）。適合度指数を確認したところ、GFI=1.00, RMSEA=.040, CFI=1.00とややモデルのデータへの当てはまりがよいと判断される。また、 R^2 は.48であり、これらの外発的動機づけ調整により、成績の自己評価の多くの分散について説明されると考えられる。

パス係数を見ると、統合的調整 (.47) と同一視的調整 (.22) が成績に対し正の影響を示していることが示された。また、推定値の有意性の検定（表2）を行ったところ、統合的調整 ($p < .01$) と同一視的調整 ($p = .041$) が統計的に有意であることが示されており、推定値から同一視的調整よりも統合的調整の方が成績を高めることに影響することが明らかになった。

表1 外発的動機づけ調整のスタイルの平均・標準偏差・相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	統合	同一視	取り入れ	外的
統合	3.193	1.338	—	.737**	.432**	-.071
同一視	3.323	1.211		—	.336**	-.150
取り入れ	2.883	1.380			—	-.031
外的	3.046	1.402				—

** $p < .01$

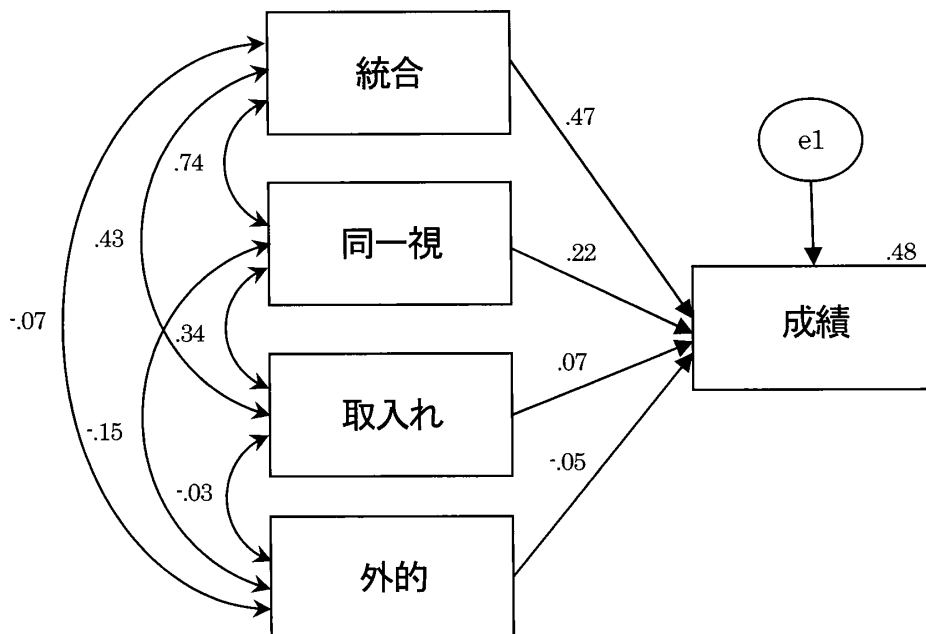


図1 外発的動機づけ調整のスタイルと成績の自己評価の重回帰モデル

表2 外発的動機づけ調整のスタイルと成績の自己評価との関係における推定値の有意性検定

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
成績	← 統合	.529	.126	4.194	**
成績	← 同一視	.299	.146	2.048	.041*
成績	← 取り入れ	.168	.193	.867	.386
成績	← 外的	-.133	.202	-.661	.508

** $p < .01$ * $p < .05$

5. 2 外発的動機づけ調整のスタイルと自己効力感・メタ認知方略、成績の自己評価との関連

外発的動機づけ調整のスタイルの傾向と自己効力感・メタ認知方略と成績の自己評価との関連を検証し、外発的動機づけ調整のスタイルの中でも成績に影響を与えることが示された、統合的調整・同一視的調整と自己効力感、メタ認知方略の各項目の記述統計との相関係数を算出した(表3)。結果は、

統合的調整と自己効力感 ($r=.379$) , 統合的調整とメタ認知 ($r=.437$) , 同一視的調整と自己効力感 ($r=.285$) , 同一視的調整とメタ認知 ($r=.350$) と、すべての組み合わせにおいて、統計的に有意に相関していることが明らかになった。

次に、統合的調整・同一視的調整・自己効力感・メタ認知方略を独立変数、成績を従属変数として、重回帰モデリングによるパス図を作成した(図2)。適合度指数を確認したところ、GFI=1.00, RMSEA=.040, CFI=1.00 とややモデルのデータへの当てはまりがよいと判断される。また、 R^2 は.49であり、これらの動機づけ調整により、成績の自己評価の多くの分散について説明されると考えられる。

パス係数を見ると、統合的調整 (.43) と同一視的調整 (.20) , 自己効力感 (.09) メタ認知方略 (.13) が成績の自己評価に対し正の影響を示していることが示された。また、推定値の有意性の検定(表4)を行ったところ、統合的調整 ($p<.01$) のみ統計的に有意であることが示されており、統合的調整のみが成績の自己評価を高めることに影響することが示された。

表3 統合的調整・同一視的調整・自己効力感・メタ認知方略の平均・標準偏差・相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	統合	同一視	自己効力	メタ認知
統合	3.193	1.338	—	.737**	.379**	.437**
同一視	3.323	1.211		—	.285**	.450**
自己効力	3.088	1.455			—	.350**
メタ認知	3.420	1.313				—

** $p<.01$

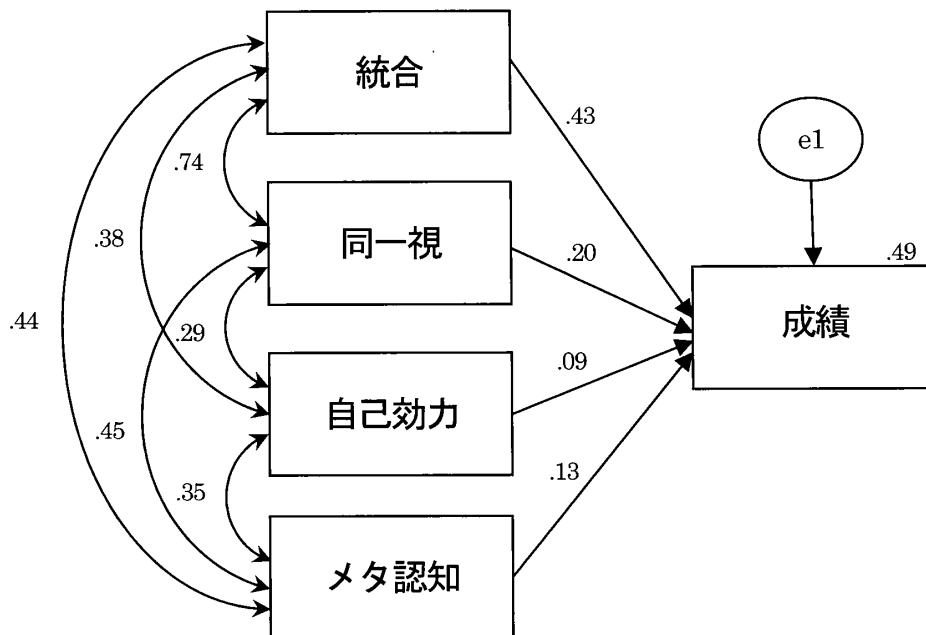


図2 統合的調整・同一視的調整・自己効力感・メタ認知方略と成績の自己評価との関係の重回帰モデル

表4 統合的調整・同一視的調整・メタ認知・自己効力感と成績の自己評価との関係における推定値の有意性検定（標準化前の係数）

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
成績	← 統合	.484	.123	3.923	**
成績	← 同一視	.267	.145	1.842	.065
成績	← 自己効力	.157	.133	1.179	.238
成績	← メタ認知	.186	.122	1.516	.129

** $p < .01$

6. 考察

学習者の外発的動機づけ調整のスタイルにおいて、統合的調整と同一視的調整が成績の自己評価に正の影響を与えており、統合的調整の方が同一視的調整よりも成績の自己評価を高めることに影響が強いことを示した。また、統合的調整・同一視的調整・自己効力感・メタ認知による分析では、統合的

調整のみ成績の自己評価を高めることに影響しており、同一視的調整や自己効力感、メタ認知方略が影響をあたえていないことを示した。本節ではその理由について考察する。

6. 1 外発的動機づけ調整のスタイルと成績の自己評価

先行研究と同様に、自律的調整である、統合的調整と同一視的調整が成績の自己評価と関連があると予測され、どちらも成績の自己評価に対して正の影響を与えていることを示した。また、先行研究と同様に、統制的調整である取り入的調整と外的調整は成績の自己評価との関連がみられなかった。

統合的調整が成績の自己評価と関連していた点に関して、Tachibana, Matsukawa, and Zhong (1996) では、日本人英語学習者が英語の教科に対して内発的に動機づけられることにより、よい成績を得ようとする態度を高めると指摘していることから、外発的動機づけ調整の中で最も内発的調整に近いとされている、統合的調整が成績に対して正の影響を与えたと考えられる。また、統合的調整に関する質問項目の回答傾向を見ると、「英語の内容が理解できるようになるのが楽しい」や「英語の知識や能力が身につくのが楽しい」などの項目の平均が高いことから、Noels, Clément, and Pelletier (1999) が主張しているように、学習者が個人的にその言語を選び、学習過程を楽しんでいるゆえに、ますます努力をし、その学習を探究しようとし、明確な学習結果に結びついたと考えられる。

Walls and Little (2005) において、同一視的調整は達成志向が高く、成績と関連していると主張されており、本研究でも同一視的調整が成績に関連していることを示した。本研究の参加者の多くは大学進学を目指しており、受験科目である英語の学習を重視していると考えられる。そのため、「英語の勉強をすることが重要だと思う」、「英語を理解できるようになりたい」などの項目が高くなり、成績の自己評価に正の影響を与えたと考えられる。

統合的調整が同一視的調整よりも成績の自己評価に与える影響が高い点について、調査の参加者のほとんどが大学進学を目指す高校3年生であるため、大学合格という共通した目標を達成するための手段的目的であっても、英語学習の価値を自己の価値観として認めている状態（鈴木・Leis・安藤・板垣,2010）とされている同一視的調整について、ほぼすべての参加者が高い状

態に保たれていると考えられる。そのため、成績の自己評価とは関係なく同一視的調整が高い参加者が多いと考えられる。一方で、統合的調整は自分自身で英語学習の意義を自己と融合した状態（鈴木・Leis・安藤・板垣,2010）とされており、この段階まで進んだ参加者は大学進学という短期的な目標の達成だけでなく、自ら進んで学習していると推測され、成績の自己評価への影響が同一視的調整よりも高くなったと考えられる。そのため、Koestner and Loiser (2002) や西村・河村・櫻井 (2011) の結果と異なり、同一視的調整よりも統合的調整の方が成績の自己評価への影響が高くなったのではないかと。

本研究では参加者の学業成績を内省によって示したため、参加者の実際の成績よりも過小、もしくは過大に申告されている可能性がある。Wigfield, Eccles, Schiefele, Roeser, and Dvis-Kean (2006) によると、能力に関する自己評価は小学校・中学校から急速に低下するとされており、本研究では同一視的調整よりも統合的調整の方が成績の自己評価への影響が大きいとされていたが、実際の学習者の英語成績やプレイスメントテスト等の結果を用いた場合、異なった傾向を示すことも考えられる。

6. 2 自律的調整・自己効力感とメタ認知方略と成績の自己評価の関係

前節で検証したように、本研究では自己効力感・メタ認知方略・統合的調整と同一視調整はお互いにある程度相関しているが、自己効力感とメタ認知方略は成績の自己評価に直接的に関連していないことが示された。

自己効力感は成績の自己評価に正の影響を与えていた自律的調整である、統合的調整と同一視的調整との間にやや相関があり ($r=.379$)、間接的に成績に影響を与えていると考えられる。山森 (2004) では、中学生を対象とした1年間に及ぶ学習動機の変化の研究において、自己効力感の高い学習者は動機づけの低下が緩和されることを指摘している。本研究の参加者について、現在のところは自己効力感が成績の自己評価に直接影響していないが、今後の成績や動機づけの変化に影響を与えるものと考えられる。

メタ認知方略も成績の自己評価に正の影響を与えていた自律的調整である、統合的調整と同一視的調整との間に中程度の相関があり ($r=.437$)、間接的に成績に影響を与えていると考えられる。Pintrich and DeGroot (1990) な

どで指摘されているように、内発的に動機づけられた学習者はメタ認知方略を利用している傾向があるため、外発的動機づけの調整スタイルの中でも、内発的調整に近い統合的調整や同一視的調整を高めるために、メタ認知方略が利用されていたと考えることもできる。

7. まとめ

本研究では高校生を対象とした質問紙調査を実施し、その結果を分析することにより、以下のことを明らかにした。

RQ1 について、学習者の外発的動機づけ調整スタイルについて、統合的調整と同一視的調整が成績の自己評価に影響しており、取入的調整と外的調整は成績の自己評価に影響していないことを示した。また、統合的調整の方が同一視的調整よりも影響が高いことも示した。

RQ2 について、学習者の外発的動機づけ調整スタイルである、統合的調整は成績の自己評価に影響を与えていたが、メタ認知方略と自己効力感は成績の自己評価に直接的な影響を与えていないことを明らかにした。

本研究の結果により、より自律的な調整スタイルである統合的調整と同一視的調整が学業成績の自己評価に関連していることが示された。

自律的な学習者を育成するために、これからの英語教育において、教師が外発的動機づけの特徴を認識し、学習者をより自律性の高い調整スタイルへと促していくことが必要である。Reeve (2002) や Dörnyei (1994) が指摘しているように、教材や授業内容を楽しく、興味深いものにするにより、学習者の動機づけをより自律性の高い調整スタイルへと変化させることが可能である。また、Reeve (2002) や Reeve and Jang (2006) で主張されているように、教師が学習者の自律性を育てるような、柔軟な対人間環境の選択の機会を与えることや、Deci and Ryan (2000) が指摘している、フィードバックとして有能性や向上力を伝えることによっても自律性の高い調整スタイルに発達させることが可能であり、学習者の学業成績の向上にも寄与することが予測される。

今回の研究の調査対象はある高等学校の 101 名の学習者だけであり、この人数がすべての高等学校の学習者を代表しているとは考えていない。今後、

参加者を増やすことや、異なる地域や学習者の習熟度の異なる学校での調査も検討したい。また、今回の質問項目の妥当性についての検討も必要である。

今後の研究では学習者の外発的動機づけ調整パターンや自己効力感、メタ認知方略がどのように変化するかを長期的に調査して行きたい。

引用文献

- Bandura, A. (1997a). *A social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bandura, A. (1997b). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, *84*, 191-215.
- Benson, P. (2011). *Teaching and researching autonomy*. 2nd. ed.. Harlow, England: Pearson Education.
- Burton, K. D., Lydon, J. E., D' Alessandro, D. U., & Koestner, R. (2006). The differential effects of intrinsic and identified motivation on well-being and performance: Prospective, experimental, and implicit approaches to self-determination theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, *Vol.91*, 750-762.
- Chen, T-L. (1999). *Motivation and language learning strategies in learning English as a foreign language*. Unpublished doctoral dissertation, Washington, DC: University of Washington.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, *Vol.11, No.4*, 227-268.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, *78*, 273-284.
- Ehrman, M. (1996). An exploration of adult language learner motivation, self-efficacy, and anxiety. In R. Oxford (Ed) , *Language learning motivation: Pathways to the new century* (pp.81-103). University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.

- Guay, F., & Vallerand, R. J. (1997). Social context, student's motivation and academic achievement: Toward a process model. *Social Psychology of Education, 1*, 211-233.
- Hiromori, T. (2004). Motivation and language learning strategies of EFL high school students: A preliminary study through the use of panel data. *JACET Bulletin, 39*, 31-41.
- Koestner, R. & Loiser, G. F. (2002). Distinguishing three ways of being internally motivated: A closer look at introjection, identification, and intrinsic motivation. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination Research* (pp.101-121). Rochester, NY: University of Rochester Press.
- Lens, W., & Vansteenkiste, M. (2008). Promoting self-regulated learning: A motivational analysis. In D.H. Schunk & B.J. Zimmerman (Eds.), *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications* (pp. 141-168). New York, NY: Routledge.
- Noels, K. A., Clément, R., & Pelletier, L. (1999). Perceptions of teachers' communicative styles and students' intrinsic and extrinsic motivation. *The Modern Language Journal, 83*, 23-34.
- Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: what every teacher should know*. New York, NY: Newbury House.
- Pajares, F. (2008). Motivational role of self-efficacy beliefs in self-regulated learning. In D.H. Schunk & B.J. Zimmerman (Eds.), *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications* (pp. 111-139). New York, NY: Routledge.
- Pintrich, P. R., & DeGroot, E. V. (1990). Motivational and self-regulated learning components of classroom academic performance. *Journal of Educational Psychology, 82*, 33-40.
- Reeve, J. (2002). Self-determination theory applied to educational settings. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research* (pp.183-203). Rochester, NY: University of Rochester Press.

- Reeve, J., Ryan, R., Deci, E. L., & Jang, H. (2008). Understanding and promoting autonomous self-regulation: A self-determination theory perspective. In D.H. Schunk & B.J. Zimmerman (Eds.), *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications* (pp. 223-244). New York, NY : Routledge.
- Reeve, J., & Jang, H. (2006). What teachers say and do to support students' autonomy during a learning activity. *Journal of Educational Psychology, 98*, 209-218.
- Rivers, W. (2001). Autonomy at all cost: An ethnography of metacognitive self-assessment and self-management among experienced language learners. *The Modern Language Journal, 85*, 279-290.
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. *Journal of Personality and Social Psychology, 57*, 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development and well-being. *American Psychologist, 55*, 68-78.
- Schunk, D.H. (1981). Modeling and attributional feedback effects on children's achievement. A self-efficacy analysis. *Journal of Educational Psychology, 73*, 93-105.
- Tachibana, Y., Matsukawa, R., & Zhong, Q.X. (1996). Attitudes and motivation for learning English: A cross-national comparison of Japanese and Chinese high school students. *Psychological Reports, 79*, 691-700.
- Vansteenkiste, M., Simons, J., Lens, W., Sheldon, K. M., & Deci, E.L. (2004). Motivating learning, performance, and persistence: The synergistic effects of intrinsic goal contents and autonomy-supportive contexts. *Journal of Personality and Social Psychology, Vol.87*, 246-260.
- Walls, T., & Little, T. D. (2005). Relations among personal agency,

- motivation and school adjustment in early adolescence. *Journal of Educational Psychology*, 97, 23-31.
- Wigfield, A., Eccles, J. S., Schiefele, U., Roeser, R. W., & Davis-Kean, P. (2006). Development of achievement motivation. In W. Damon & R. M. Lerner. (Ser. Eds.) and N. Eisenberg. (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology*. 6th ed. Vol.3, *Social emotional and personality development* (pp. 933- 1002). New York: Wiley.
- Zimmerman, B. J. (1986). Development of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81, 329-339.
- 市原 学・新井邦二郎. (2006). 「数学学習場面における動機づけモデル検討」. 『教育心理学研究』, 54, 199-210.
- 河合 靖. (2000). 「外国語自律学習と学習者論」. 『北海道大学言語文化紀要』, 38, 55-83.
- 櫻井茂男. (1987). 「自己効力感が学業成績に及ぼす影響」. 『教育心理』 35, 140-145.
- 櫻井茂男. (2009). 『自ら学ぶ意欲の心理学』. 東京：有斐閣
- 鈴木渉・Adrian Leis・安藤明伸・板垣信哉. (2010). 「日本人大学生の英語学習に対する動機づけ調査—Dornyei の L2 motivational self system に基づいて—」. 『宮城教育大学国際理解教育研究センター年報』, 6, 34-43.
- 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男. (2011). 「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス」. 『教育心理学研究』, 59, 77-87.
- 文部科学省 (2008a). 『学習指導要領—小学校学習指導要領』. 東京：開隆堂出版.
- 文部科学省 (2008b). 『中学校学習指導要領解説 総則編』. 東京：ぎょうせい.
- 文部科学省 (2010). 『高等学校学習指導要領解説 総則編』. 東京：東山書房.
- 山森光陽 (2004). 「中学校 1 年生の 4 月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか」. 『教育心理学研究』, 52, 71-82.

付録

質問紙調査の質問項目

統合的調整

1. 英語が面白い。
2. 英語の勉強が楽しい。
3. 英語の教科書が楽しい。
4. 英語の知識や能力がつくのが楽しい。
5. 知的好奇心が満たされる。
6. 英語の内容が理解できるようになるのが楽しい。

同一視的調整

1. 英語の勉強をすることが重要だと思う。
2. 英語で新しい事を学びたい。
3. 英語を理解できるようになりたい。
4. 将来英語を使った仕事に就きたい。
5. 将来海外で仕事をしたい。
6. 英語の資格を取りたい。

取り入れ的調整

1. 英語の先生によい生徒だと思われたい。
2. 英語の勉強をしないと自分のことを恥じることになる。
3. 他の生徒に自分は英語ができると思われたい。
4. 英語の試験でよい点数を取りたい。
5. 英語を勉強しないと自分が不安になる。

外的調整

1. 英語の勉強をしないと親がうるさい。
2. 英語の勉強をしないと後で困ると思う。
3. 英語は勉強することになっていると思う。
4. 先生に怒られないため。
5. 英語の勉強をするのが規則である。

自己効力感

1. 何かの計画をたてると、その計画は必ず実現できる。

2. 自分で出来ることは他人には頼らないで自分でやる。
3. その気になれば、勉強はできると思う。
4. 失敗するとよけいやる気が出てくる。
5. 授業中、自分の意見を自信をもって言える。
6. たいていのことは、人よりうまくできると思う。
7. 授業で出された問題や課題は、きちんと解答できる。
8. 自分の意見は自信をもって言える。
9. 努力すれば、将来、自分のやりたいことがやれると思う。
10. 失敗しても最後までやりとげることができる。
11. 面倒なことでも、しなければならぬことはやり遂げるまで頑張れる。
12. 物事がやり遂げられるかどうか心配である。
13. 何かしようとする、すぐに取り掛かれる。
14. 最後までやり遂げる前に、あきらめてしまうことが多い。

メタ認知方略

1. 勉強中に、やっていることが正しくできているかを確認する。
2. 勉強を始める前に、何をどうやって勉強するかを考える。
3. 勉強する時は、どんな内容なのかを考えてから始める。
4. 勉強する時は、大切な所はどこかを考えながら勉強する。
5. 勉強する時は、最初に計画を立ててから始める。
6. 勉強する前に、これから何を勉強しなければならないのかを考える。
7. 勉強中に、たまに止まって、一度やったところを見直す。
8. 勉強中に、自分が分からない所はどこかを見つけようとする。

成績

1. クラスの中ではいつも上位に入っていると思う。
2. 英語の試験では高い点数を取れる。
3. 英語は得意な教科である。
4. 英語の授業中で、質問されることはほとんど答えられる。
5. 級友から英語はできると思われている。
6. 英語の能力は他の生徒より高いと思っている。